

## [生活]

## 自分自身への気づきを自覚する表現活動の在り方に関する一考察 — 第1学年「やぎさん だいすき」の実践を通して —

野島 聡子\*

### 1 問題と目的

生活科は、子どもが充実した活動や体験をするとともに、そのことで生まれる気づきを大切にす。この気づきを質的に高める手立ての一つとして、学習指導要領解説生活編(2008)では、活動を振り返り表現する機会を設けることが明記されている。活動や体験したことを言葉などによって振り返ることで、無自覚だった気づきが自分の中で明確になったり、それぞれの気づきを共有し関連付けたりすることが可能になるからである。活動や体験で行ったこと、感じたこと、考えたことなどは、時間とともに失われていくことが多い。また、体験や活動そのものの印象が深いために、その中での出来事や様子を見逃したり、気づきを自覚せずに終わってしまったりすることも多い。活動の中での様々な気づきを言葉や絵などの方法を使って表現することにより気づきを自覚するという低学年の発達特性を考え合わせると、体験活動とともに表現活動を適切に位置付けることが重要になるといえる。

これを受け、体験活動と表現活動の相互作用を重視した実践報告がなされるようになってきた。甫仮(2013)は、第2学年の子どもを対象に、体験活動と表現活動を相互に繰り返すことで一人一人の気づきや対象とのかかわり方がどのように変容するか分析している。子どもは、体験活動と書く・話すといった表現活動を相互に繰り返すことで、対象とのかかわり方が変容し、自分自身の頑張りや成長を自覚するようになったと報告している。

私自身、これまでの実践の中で活動の後に書く活動を位置付けるよう心がけてきた。多くの子どもたちは、書くことで自分の活動を振り返ったり、感じたこと、気付いたこと、思ったこと等を整理したり、関連付けて考えたりすることができるようになった。また、振り返って活動を整理することで、次の活動への意欲や見通しをもったり、対象との新たなかかわり方を生み出したりできた。この点で、甫仮の報告に共感できる部分が多い。

しかし、動物飼育のように対象とのかかわりが日常的になるような活動の場合、書くタイミングをどこに設定するかが難しく、日々の気づきが自覚されることなく過ぎてしまうことがあった。そこで、日々の気づきをカードに書き溜めていく活動を取り入れたこともあったが、それらの多くは対象に関する気づきで、自分自身の頑張りや成長を自覚するような気づきにまではなかなか至らなかった。特に1年生の子どもにとっては、活動の後に書くことだけでは自分自身の頑張りや成長を自覚することは難しい。木村(2012)は、生活科における気づきには、「対象への気づき」と「自分自身への気づき」の二つがあり、「自立への基礎を養う」という生活科の目標から「自分自身への気づきを」を最も大切にすべきだと述べている。自分自身への気づきを自覚するような表現活動の内容や時間の設定について手立てを講じていく必要があると考えるようになった。

そこで、本研究では、子どもが自分自身への気づきを自覚する表現活動の在り方について考察していくことを目的とする。具体的には、まず、第1学年の飼育活動の実践において、子どもが書いたり話したりした表現内容を明らかにする。そして、その結果に基づいて、自分自身への気づきを自覚した表現活動の在り方について考察する。

### 2 研究の方法

公立A小学校の1年生(男子13名、女子13名、合計26名)に対して、平成24年6月から12月までに行った「やぎさんだいすき」の単元で以下のような手立てを講じ、考察した。子どもの自分自身への気づきを自覚した姿を、実際の言動や作文等をもとに見取った。そして、そのような表現活動を可能にする要件について考察した。

\* 上越市立高志小学校

### (1) 日常継続的な書く活動の設定

子ども自身が自分の興味の有り様や自分自身への気づきを自覚できるように対象とのかかわりについて日々記録していく活動を設定する。その記録を1週間ごとやひと月ごとなど振り返ることにより自分自身への気づきを自覚していく過程を明らかにする。

### (2) 自覚を促す意見交流の場の設定

書く活動と併せてその書いたものを基に意見交流する活動を設定する。文字を習得する過程にある1年生の子どもにとっては、書く活動だけでは自分の気づきを十分に表現することが難しいと考えられる。そこで、書いたものを基に意見交流する場を設定することで、新たな気づきを得たり、自分自身への気づきをより自覚したりできる過程を明らかにする。

## 3 活動の実際

### (1) 「ヤギ日記」を基にした振り返り




#### ① ヤギ日記

6月25日に2頭の子ヤギを迎え、動物飼育の活動が始まった。子どもたちがヤギを飼いたいと願い、様々な話し合いをし、迎えるための準備をした上で始まった活動である。とはいえ、動物飼育の場合、飼育する動物を自分たちで選択したとしても動物を苦手とする子どももいて、誰もがすぐに動物と積極的にかかわれるわけではない。そうした子どもたちは、生活科の時間をできるだけ動物飼育単元に充てかわる時間を確保するようにしても、動物に親しみをもったり積極的にかかわったりするまでには、時間が必要である。生活科の時間だけに限らず、いつでもかわるようになっていく必要がある。いかに日常化、生活化を図るかが大切だと考えた。

そこで、毎日「ヤギ日記」を書くようにした。ヤギ日記には、ヤギに会いに行った時間、ヤギにしてあげたことや気付いたことを記録する。毎日書くので子どもたちは、生活科の時間に限らず、登校後、2限と3限の間の20分休み、昼休みのいずれかにヤギに会いに行くことになる。毎日書くので、負担にならないように1日分は40字程度で書ける簡単なメモ程度とし、ヤギに会いに行った時間帯に丸を付けるという書式にした。一週間分の記録をA4サイズの用紙1枚(図1)に収め、金曜日には、その週に書いたことを読み返し、自分とヤギとのかかわりを振り返られるようにした。ヤギ日記を書く時間は、昼休みの後に行う清掃が終わって5限が始まるまでの時間帯に位置づけた。5分程度の短い時間だが、子どもたちは、各清掃場所から教室へ戻ってくると「うがい、手洗い、ヤギ日記」というのが合言葉になり、清掃後のうがいと手洗いを済ませた子から、その日の自分とヤギとのかかわりを振り返り、ヤギの様子などを記録していくことが習慣になっていった。

#### ② A児のヤギ日記から

A児はヤギを飼いたいと願い、迎える準備にも意欲的に取り組んでいた。しかし、子ヤギとはいえ動物を目の前にする

	／ ( ) 6・20・06	／ ( ) 6・20・06
やぎにつき  		
No. ( ) 		
／ ( ) 6・20・06	／ ( ) 6・20・06	／ ( ) 6・20・06

[図1 ヤギ日記]

#### <A児のヤギ日記 No1>

6月25日 (20)  
ヤギがきたよ。  
6月26日 (朝・昼)  
ヤギがあるいていたよ。  
6月27日 (朝)  
ヤギを見た。  
6月28日 (昼)  
ヤギがくさをたべていた。  
6月29日 (朝)  
ヤギを見た。

#### <A児のヤギ日記 No12>

10月22日  
文かさいのだい休。  
10月23日 (昼)  
じゃんぶとぼぼが小やからだっそうした。小やへもどすのが大へんだった。  
10月24日 (20・昼)  
ぼぼがだっそうしたけど、すぐに小やの中に入った。じゃんぶがじぶんから小やに入ったからすごい。  
10月25日 (20・昼)  
サツマイモのつるをいっぱいあげた。いっぱいたべていた。あげているときにひっぱられた。あと、ぼぼのせ中をさわった。あたたかかった。  
10月26日 (20・昼)  
じゃんぶのせ中をさわった。ぼぼと同じくらいあたたかかった。ふわふわしていきもちよかった。

と、恐怖心が先に立ち、なかなか触ったり近寄ったりすることができず、積極的にかかわることができないでいた。

A児のヤギ日記No1を見ると、ヤギ小屋の外からヤギを眺め、ヤギがしていたことを簡単に書いている。ヤギに会いに行った時間も登校後だけとか、昼休みだけ等、ヤギが来るのを楽しみにしていたにもかかわらず、積極的に会いに行ったわけではないことが分かる。週末の振り返りでは、「ヤギが来てよかった」とだけ言っていた。しかし、飼育を始めて4か月が過ぎた頃から記述内容が変わっていく。ヤギ日記No12を見ると、自分がヤギにしてあげたこと、ヤギと触れ合うことで感じたことの記述が多くなる。ヤギとのかかわり方に変化が見られるようになったのだ。ヤギ日記を書くときは、「散歩に行くときには、うんち取り用の箒と塵取りを持っていくと便利だよ」「うんちをするときは、尻尾を上げるからすぐに分かるんだよ。そのときに塵取りをお尻に持っていくとうんちを拾わずに済むよ」と友達と話しながら書くことが多くなった。また、週末の振り返りでは、「じゃんぷとぼぼと一緒にいるのが楽しかった一週間だった。だってね…」と、ヤギ日記には書かれていないが、その週にヤギと一緒にしたこともあわせて報告するようになった。ヤギに心を寄せ、愛着をもってかかわっていることが分かる。一週間の記録を終えるとヤギ日記は、ファイルに綴じていくようにしたので、綴じるときには、それまでのヤギ日記も目にする。この時、ファイルに綴じながら「先生、見て！私の最初のヤギ日記って、ヤギがしたことしか書いていないの。当たり前のことしか書いていないんだよ。だんだん仲よくなってきたんだよ」とそれまでのヤギ日記を見せながら報告しに来た。これまでのヤギ日記を振り返りながら自分とヤギとのかかわり方の変化を自覚できた瞬間だったと考える。

ヤギ日記No18では、同じシートとは思えないくらいに文章量が増えている。ヤギ小屋に行った時間帯も多くなっていることが分かる。ヤギとのかかわりが増えたので、必然的に書き残したいことも多くなり、1行を自分で2段に分け、小さな字でたくさんを書くようになった。この頃になると、書く量は増えていくが、書く時間は短くなっていた。また、最後のヤギ日記No20では、ヤギがしたことよりもヤギとしたこと、そして、その時の感情が記述されるようになり、ヤギを返した後も記録を続けていることが分かる。週末には、「じゃんぷとぼぼのことをいっぱい考えたけど、寂しい一週間だった」と振り返っていた。

最初は、ヤギ日記を書くためにヤギ小屋へ向かっていたA児だったが、ヤギ小屋へ行くことが習慣になるとヤギとのかかわりが増え、親しみを増していった。休み時間になると、どんなに雨が降っていても風が強くても「ヤギ、行ってきまあす」と言ってヤギ小屋へ向かった。夏休みが終わって2学期が始まる頃には、ヤギ日記を書くためにヤギ小屋へ行くのではなく、ヤギに会いたいから行くようになった。ヤギ日記をきっかけに繰り返しヤギに会うことになり、愛着をもつことになった。毎日ヤギとかわることで、小さな変化に気付く。毎日書くことで自分のしてきたことや思いを

#### ＜A児のヤギ日記 No18＞

12月3日（朝・20・昼）

じゃんぷがずっと小やの中に入っていた。さむそうだった。でも、毛はふわふわしていてせ中はあたたかかった。

12月4日（朝・20・昼）

今日、じゃんぷとぼぼは、やねのところしかいませんでした。そしたら、わたしの手をなめました。なめられてもへいきでした。くすぐったかったです。

12月5日（朝・20・昼）

今日、ぼぼにさわりました。あたたかかったです。さむいときは、ぼぼやじゃんぷにさわるとだいじょうぶです。手ぶくろみたいたよ。

12月6日（朝・20・昼）

ぼぼにさわるときもちいんです。ぼぼもきもちよさそうなかおをしていました。なでるのがいいです。あと、ぼぼが、みどりゲロをしていました。しんばいでした。

12月7日（朝・20・昼）

今日、ヤギとうばんでした。うんちがすくなくてびっくりしました。キャベツをたくさんあげたっていついたのうんちがすくなくいです。じゃんぷが、ずっととっしんをしてきました。とっしんされてもへいきです。

\*子どもたちは、ヤギが頭突きをすることを「突進」と名付けていた。

#### ＜A児のヤギ日記 No20＞

12月17日（朝・20・昼）

20分休みにキャベツをあげました。ふくろの中に入っていたキャベツをぜんぶあげました。たべてよかったです。ひる休みにさんぼをしました。わたしは、じゃんぷとぼぼのさいごのさんぼをしました。じゃんぷにとっしんされそうになりました。うれしかったです。

12月18日（朝・昼）

今日、おわかれかいをしました。おぎたにさんのかわりに金いさんがきました。ちゃんとつれていってくれるといいです。じゃんぷとぼぼとはなれるのはさみしいけど、いっぱいかんがえてかえしました。ひる休みにヤギ小やのさいごのそうじをしました。じゃんぷとぼぼがいなくてさみしかったです。

12月19日（昼）

じゃんぷもぼぼもいませんでした。3くみの人は、いつもみたいにいたけど、じゃんぷとぼぼは、いませんでした。さみしいです。もっと早くなかよくなっていればよかったです。

12月20日

ヤギ小やにいくのをやめました。いくとさみしくなるからです。じゃんぷとぼぼをおもいだしすぎるからです。

まとめたり見つめ直したりできる。また、ヤギ日記を書く時間は、友達と気付きを伝え合うことにもなり、ヤギについての情報交換が行われ、気付きの質が高まる場となっていた。対象であるヤギへの気付きを自覚することができた。そして、そうした蓄積された気付きを振り返ることで自分とヤギとのかかわり方の変化を自覚することができた。まさに自分自身への気付きを自覚することができたのである。

## (2) 作文を基にした振り返り

毎月の体重測定日や獣医師の診察日、活動の節目等には、ヤギ日記と並行して作文シートにしたことを順序よく整理して書いたり、その活動で思ったことや考えたこと、次にしてみたいことなどを書いたりするようにした。そして、さらにお互いの作文を読み合ったり、その作文を基に意見交流したりする場を設定した。

ヤギとのお別れ会は、動物飼育単元の終末に当たる。対象であるヤギについての気付きよりもヤギのことを考えて行動できるようになった自分自身の成長に気付ける場だと考えた。そこで、ヤギとのお別れ会を終えた後、作文シートにヤギとのお別れ会を終えた今、ヤギの世話をして思ったこと、感じたこと、考えたことを書くようにした。作文の題名は、各自で考えて付け、書く量は指定しなかった。

### 〈ヤギとのお別れ会の後に書いたB児の作文シート〉

題名「わかれたくないおわかれかい」

今日、じゃんぷとぼぼのおかえりの日でした。さみしいけど、みんながまんしました。ぼくは、すごくさみしくて、みんなよりがまんしました。

じゃんぷとぼぼのおもい出が、たくさんくれました。ありがとう、じゃんぷ、ぼぼ。そして、かしてくれたおぎたにさん、金いさん。じゃんぷとぼぼのことをよくしました。ありがとうございます、ほんとうにありがとうございます。そして、じゃんぷとぼぼのじっけんもできました。そのじっけんは、じゃんぷとぼぼは、いっぱい草をたべるか、すきな草はなにか、とっしんをするか、おちちはどこにあるか、つのはいたいかな、立つか、さんぼはすきかのじっけんができました。ありがとう。ほんとうにありがとうございました。

じゃんぷとぼぼもさみしいかもしれないけど、じゃんぷもぼぼも先生もみんなもがまんをして、がまんをして、じゃんぷ、ぼぼをかえました。ほんとうは、かえたくありませんでした。だけど、がまんをして、がんばってがまんをしてかえました。今ごろ、じゃんぷとぼぼは、みんながいなくて、ないていとおもいます。じゃんぷとぼぼが、かわいいからかえしたくなかったけど、がんばって、がんばって、がんばって、がんばってかえました。今、ぼくのきもちも、さみしいきもちです。あと一つ、「じゃんぷとぼぼをかえてー」というかんじです。がまんしたけど、なきたいです。ぼくは、やっぱりかえさないほうがよかったです。今ごろ、じゃんぷは、みんながいなくて、とっしんをしているとおもいます。いつもぼくがおさえてあげるのに、今ごろ、ぼくがいなくて、さがしているとおもいます。

みんなではなしあって、みんなできめて、みんなでがまんしたけど、かえさなければよかったです。校ちょう先生は、がまんできたのがすごかったっていったけど、がまんできたからせいちょうしたっていったけど、すごくなくていいです。(この後に何か書いて消した跡あり)

(作文を読み合い、意見交流した後、以下を書き加えた)

でも、じゃんぷとぼぼもがんばったし、すごくなってほしいから、ぼくは、がまんします。

(~~~~~ .....の下線は、筆者による)

B児は、ヤギの世話をしたいと願いながらも動き回るヤギが怖くてなかなかヤギに触れることができなかった。ヤギの飼育を始める前に出かけたファームランドでは、頑丈な柵越しであってもヤギが近付いてくると怖くなり、2歩も3歩も後ろに下がり、餌をあげることさえできなかった。それが、学校でヤギを迎え、毎日ヤギ小屋へ足を運び、友達がヤギとかかわっている様子を見たり、ヤギと散歩する友達の後を追いかけていたりするうちにヤギ小屋の中に入り、ヤギと頭突きごっこをして遊べるようにまでなった。(写真1)

B児にとってヤギの飼育は、「いろいろな実験ができた」と思えるくらい、ヤギの性質や習性の中から学ぶことが多かった。それらの一つ一つがB児にとって対象であるヤギへの気付きである。そして、親しみを感じるようになり、愛

着をもってかかわってきたヤギを返すためには、「我慢」が必要で、その我慢をするためには、「頑張る」「頑張る」と、かなりの頑張りが必要だった。「頑張る」「我慢して」返したにもかかわらず、やはり別れなくなかったと後悔している。ヤギがいなくなってしまうという大きな心の揺れがあることが分かる。この作文には「頑張る」が6回、「我慢」が11回も登場している。心の揺れを自分でなだめようとしているようにも感じられる。この作文を読んだ時、ヤギに愛着をもってかかわり、ヤギの世話を通して自分本意ではなくヤギのことを考えられるようになったB児の成長を感じた。普段、感情をストレートに表現し、自分本意で行動することが多かったB児にとってヤギの飼育活動は、B児の心を大きく成長させたと感じた。しかし、その成長を感じたのは、支援者である私であり、当のB児は、ヤギのことを考えられるようになった自分の成長に気付くよりも、ヤギとの別れを惜しむことが精いっぱい自分自身の成長を自覚するまでには至っていないように感じた。



【写真1 ヤギと頭突きごっこをするB児】

そこで、翌日、B児の作文をみんなで読み、感じたことを話す場を設定した。「B児が、我慢しただけでなく、頑張る我慢したのがすごいと思った」「ヤギはいなくなったけど、帰ってきてほしいと思う気持ちは自分も同じ。だけど、ヤギを返さなければ、ヤギがダメになってしまうから、ヤギのことを考えて返したのが立派だった」「自分も我慢してお別れをした。じゃんぷとぼぼのためにお別れしたのだから、ヤギは、今は悲しいかもしれないけど、後でよかったと思ってくれるはずだ」など、意見交流の中でB児の気持ちに共感し、そして、それぞれがヤギのことを考えて返すという決断をしたことは正しかったと考え、それができた自分たちは成長できたと実感していた。友達感想を聞いて、B児は、最後に「でも、じゃんぷとぼぼがんばったし、すごくなってほしいから、ぼくは、がまんします。」と書き足した。まさに自分自身の成長を自覚した瞬間だったと考える。また、「自分も同様のことを思った」「自分は我慢とは書かなかったが、あの時、B児と同様に我慢していた」など、B児の作文を通して自分自身の気づきを自覚する子どもも多かった。

この日、B児は家に帰ると母親に「昨日、じゃんぷとぼぼが、荻谷さんのところに帰って行ったんだ。すごく寂しかったけど、じゃんぷとぼぼは、ぼくのおかげで成長したんだ。ぼくは、じゃんぷとぼぼのおかげで成長したんだ」と伝えたそうだ。夕食時、いつもヤギのことが話題になるので、お別れ会の日、きっとたくさん話をするだろうと思っていた母親は、B児が、ヤギの話をもっとくしようとしなかったのも、ヤギと離れてしまうことがかなりショックだったのではないかと心配していた。でも、翌日、B児が言った「ヤギのおかげで自分も成長した」という言葉に、本当に成長したなと感じたそうだ。自分自身の成長に自信をもったB児の姿がうかがえる。

## 4 考察

### (1) 日常継続的な書く活動が自分自身への気づきを高める

木村は、1年生の場合、自分自身への気づきに至る前提としてそれまでに多くの活動実績があることと対象への気づきが蓄積されていることを挙げている。子どもたちは、ヤギの好きな草、餌の与え方、小屋掃除の仕方、散歩の仕方、ヤギが好むこと、嫌うこと等、日々の飼育活動の中で様々なことに気付くチャンスがある。しかし、活動そのものに没頭しているので、そうした様々な気づきの多くは、自覚されることがない。活動を振り返り、頭の中にあつたたくさんの気づきを整理して表現することで気づきを自覚できる。ヤギ日記は、毎日の気づき、一週間の気づき、飼育活動の気づきを子どもが自覚できる貴重な振り返りの場になったと考える。

かつて、気付いたことや発見したことなどを小さなカードに書き溜め、枚数が増えていくことを励みに気づきを蓄積していく活動を設定したことがあった。しかし、日々のカードを整理することに追われたり、カードの枚数が多くなればなるほどそれらのカードを基にこれまでの自分の対象へのかかわり方や気づきの変容を1年生の子どもが自分でとらえていくことが難しかったりして、うまく機能しなかった。ヤギ日記の場合、一週間の気づきが一目瞭然に分かるので、その週の自分とヤギとのかかわりだけでなく、前の週と比較することも容易にできる。A児が自分とヤギとのかかわり方の変化に気付いたように1年生の子どもでも自分の変容を見取ることが可能である。

また、毎日書くということが、対象であるヤギに毎日会いに行くことになった。それが、習慣化されることで、ヤギと過ごす時間が多くなり、ヤギへの愛着を形成することにつながった。愛着をもってヤギにかかわるようになると、日々の小さな変化にも敏感に気付くことができる。また、対象であるヤギをただ観察して気付いたことではなく、見て、触れて、心を通い合わせた上での気付きなので、実感を伴った気付きになる。対象に対して実感を伴った気付きをたくさん蓄積することができる。この気付きの蓄積が、やがては自分自身への気付きを自覚することにつながっていくと考える。この点からも日常継続的に書くヤギ日記は有効であったといえる。

## (2) 友達との意見交流が自分自身への気付きを高める

活動の節目や大きなイベント的な活動の後には、作文シートを使って振り返るようにした。メモ程度のヤギ日記とは違い、活動での様々な思いや考えを詳しく書き綴ることができるからである。B児がヤギとのお別れ会の後に書いた作文は5枚（縦12文字×横8行の作文専用シート）にもわたるが、鉛筆は止まることなく、黙々と書いていた。その作文の内容を見ると、単元末という節目だったので、自分自身への気付きに関する記述が多く見られた。B児にとって飼育していたヤギを返すことは心が大きく揺り動かされる活動となり、書きたい内容がいくつも生まれている。まさに体験活動と表現活動が相互に作用していることが分かる。書く内容を充実させるためには、充実した体験活動であることが前提であるといえる。

1年生の場合、自分自身への気付きが表れている作文でも書いただけでは、自覚するまでにはなかなか至らない。かつて、「頑張れた」「〇〇ができた」という記述があると、書いた子どもが実感しているかどうかは考えずに支援者である私が「この子どもは、できるようになった自分、頑張れた自分に気付き、成長した」と判断していた。作文シートに書かせるだけで私だけが満足してしまうことがあった。しかし、子どもが「できるようになった自分」を自分で自覚するためには、表現された自分自身への気付きを後押ししてくれる過程が必要である。書いた後の作文をお互いに読み合い、意見交流することで「できるようになった自分」を自覚することができた。また、自分の書いた内容と照らし合わせて意見交流するので、お互いに頑張れた自分、ヤギのことを考えて行動できた自分を自覚することができていた。自分で気付き、自覚する方が、担任から「ヤギのことを考えて行動できるようになったね」と声をかけられて気付けられるよりもうんと実感を伴った気付きになる。振り返って作文を書くだけでなく、意見交流をすることを組み合わせることは、自分自身への気付きを自覚することに有効であった。特に1年生の場合、書いた作文を基に意見交流するという活動を繰り返すことにより、作文の中に表現されている自分自身への気付きを見取る力が育っていくと考える。そして、この力が、やがては、自分の書いた作文を読み返すことで自分の活動を意味付けたり、自分自身への気付きを自覚したりできる力に結び付いていくと考える。

## 5 課題

自分自身への気付きを自覚できるようにするには、体験活動と表現活動が相互に作用することが大切である。すなわち体験活動も表現活動も充実していることが必要である。書く、話すという表現活動は、国語の内容と密接にかかわっている部分が多い。1年生の場合、文字を習得し、自由に文字を操れないと書く活動は成立しないし、文字を書くこと自体に時間がかかると書く活動が苦痛なものとなり書き溜めていくことのよさを実感することができない。また、話し合う活動でも自分の思いを一方的に述べ、聞き合う姿がないと意見交流する意義を感じることができないだろう。1年生にとって有意義な表現活動にするために国語との関連をどう図っていくかが課題である。

## 6 引用文献

- 木村吉彦 『生活科の理論と実践－「生きる力」をはぐくむ教育のあり方－』、日本文教出版、2012
- 浦仮直樹 「対象に愛着をもち、自分自身への気付きを自覚する生活科の学び－体験活動と表現活動を相互に繰り返すことの有効性に関する一考察－」、教育実践研究第23集、上越教育大学学校教育実践研究センター、2013
- 文部科学省 『小学校学習指導要領解説 生活編』、日本文教出版、2008